

ほつかいどう NIE 通信

Newspaper in Education



発行 北海道NIE推進協議会

〒060-8711 札幌市中央区大通西3丁目6 北海道新聞社内 ☎011-210-5802 FAX 011-210-5826

21世紀は新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す「知識基盤社会」であると言わ
れています。私たちにはこれまで「新しい知識」や「情報」を新聞・テレビ・ラジオ等のマスメディアによつて得てきました。しかし、昨今はインターネットや携帯電話が普及し、居ながらにして映像や音声から多くの情報を得ることができます。一方、その弊害の一つは老若男女を問わず活字離れを生みだしたことで

セミナーは地域のバランスを考慮し道内の中核都市で開催。今年も前年度と同じ計10地区での開催を予定している。このうち北広島市では、同市教委が夏休みの研修講座の一つとして呼びかけた結

道推進協 NIEセミナー

北海道NIE推進協議会が各地で開くNIEセミナーは本年度、三笠市立三笠小での岩見沢・空知セミナー(10月26日)で、予定の日程の半分を終える。本年度は北広島市を新たな会場に加え、教師や生徒が数多くいる札幌圏で初の開催を実現した。また公開授業を大幅に増やしたもの大きな特徴で、学習指導要領の改定で情報リテラシーの重要性が高まる中、参加者も前年度より増加。11月から後半の取り組みに移る。(関連記事2面に)



読み取る力どうつける

稚内市教育長 手島 孝通

図書館を全市民の重要な生涯学習活動の拠点と位置付けています。特に、子どもたちの読書活動では、「稚内市子ども読書活動推進計画」に基づき子どもたちが

し、「学校図書館」・「新聞」の計画的利用や活用の記述が多く見られます。

旭川市立春光台中教頭が「児童生徒の情報選択能力

でタブレット端末を用いた授業開発例を提示する。

さらに、11月3日の稚内・宗谷セミナーでもNIEアドバイザーの福澤秀一が「児童生徒の情報選択能力

が確実に育む新聞スクラップ講習会に挑む。

参加者の推移を見ると、NIEの三要素をバランスよく配置した実践発表を企画し、参加した先生方の授業づくりに資するセミナーにて、「新聞を活用する、機能を学ぶなど、NIEの三要素をバランスよく配置した実践発表を企画し、参加した先生方の授業

していきたい」と話し、12月の苫小牧と旭川、来年1月の室蘭、同2月の帯広まで続く後半日程の準備を進めている。

日下部憲一コーディネーターは「新聞を活用する、機能を学ぶなど、NIEの三要素をバランスよく配置した実践発表を企画し、参加した先生方の授業

していきます。教職員の学び合いや情報交換の場として、授業づくりを進めたいと思

り、その社会力とも言える「知識」や「知恵」に負うところ大であります。そのためにも、稚内市が重視している一つは、図書館の整備と機能の充実であり、

ヨンブ」を開催し、子どもたちの読書活動の習慣化を図る取り組みを進めています。その成果が子どもたちの「調べ学習」や「朝読書」の拡大や定着に現れていることは喜ばしい限りです。

昨年に続き、当市でNIEセミナーを開催頂くことにお礼申し上げます。新聞は教材の宝庫であり、子どもたちが新聞を活用した多種多彩な学びを通して身につけられる力は、「生きて働く知識や知恵」であり、未来社会を発展に導くものと確信し、今後も新聞を活用した授業づくりを進めたいと思

ります。

8月8日に北広島で開かれた第1回NIE北広島・石狩セミナー



参加者増で前半終了

2012年(平成24年)10月25日

当協議会主催の北見・オホーツクセミナーが9月7日、網走小で開かれた。同小3年2組の公開授業と小中高3教諭による実践報告を行った。

小3が見出し付けに挑戦

網走

オホーツクでの開催は10回目。公開授業で渋谷涉教諭が学級新聞の作り方を指導した。「編集会議」「取材」「執筆」などについて順次学習、この日は見出しをつけることに挑戦した。前時間に、ふだん授業でキャラクターとして使っている動物を記事で紹介してお



し言葉、音や様子などを入れるなどの方法を教えた
II写真II。同教諭は授業後意見交換で「新聞が言葉を工夫していることを理解させたかった」と説明した。

実践発表では、網走市立東小の後藤亜希教諭が読売新聞の「コボちゃん」を使い、4こま漫画を1年生でわかるように紙芝居にして取り組みを報告した。

北見市立小泉中の北川大教諭は興味のある新聞記事を、出てきた国や都市を資料で調べて紹介し、多様な記事があることに気付かせる地理の授業や、企業の仕組みを商況欄などから理解させることで紹介し

震災記事使い実践報告

北海道・東北アドバイザー会議

NIE活動の、地域での課題などについて話し合う北海道・東北ブロックNIEアドバイザー会議が9月22日、仙台市内の河北新報本社で開かれた。道内の3人を含むアドバイザー10人が出席し、東日本大震災関連の記事活用法などについて、実践報告と意見交換を行ったII写真II。



斜里高の井村了介教諭は職業選択を視野に社会に触れる授業を報告。現代社会紹介した。でダウントンの出生前診断に関する記事を使つた実践を

受けている。

ブロック会議は昨年の青森市に続く開催で、柳谷直明・三笠小教頭、野上泰宏・西陵中教頭(帯広)、福澤秀・春光台中教頭(旭川)らアドバイザーと新聞協会、各地の推進協関係者を合わせ30人が出席した。

会議では、仙台市立松陵小の阿部謙教諭が「復興へ、NIEの役割」をテーマに発表。被災直後は震災関連記事を教材化する気はないなかつたが、子どもたちが作る「ファイト新聞」に背中を押されるように取り組み、「被災の困難を乗り越える人材育成も、NIE実践者の使命」と思い定めるに至った心情を語った。

道内からも「福島のこと(原発)をどう扱うか、悩ましい問題」「野上教頭」「年1回でいいから、学校全体でNIEを実践する機会を設けることが重要」「福澤教育」について紹介した。柳谷教頭は月1度、ボランティアで行う夜の「学習塾」について紹介した。東北の出席者からは、モデル校を指定した復興教育の試み(岩手)や、記者を招いた小学校の国語の授業例(山形)も報告された。

アドバイザー会議に先立ち、北海道と東北6県のNIE推進協事務局長会議も開かれ、事務局長を務める新聞各社の出席者からは実際に指定校の応募の少なさや、まだ低いNIE活動の認知度などについて課題や対策が報告された。

板垣 青空

上浦幌中教諭



義務教育後の進路決定や将来を考え始める中学生にとって、情報収集力は必要不可欠です。情報の宝庫で身近にある新聞の活用は、情報収集力の基礎を養い、社会を見る目を育てることができる絶好の教材です。そこで、3年間の系統性を考えながら、新聞スクラップを取り組みました。3年間の系统性を握る力」「記事の内容に関する考え方を構築する

力を、段階を追つて積み上げていく心がけました。それを土台に3年間の進路学習では「将来就きたい職業」という大

きる生徒には、関連する記事を集めさせ、進路について考えながら整理させました。希望する職業に関連する記事が集めにくかつた生徒には仕事を内容を大きな分野でと

記事で取り上げた事柄を、さらに自分で調べながら理解し、内容に関する考え方を構築する際は、自分の立場に置き換えてみる②経験と比較する③アンケートや仲間の考え方を聞いてみる」を意識するよう指導しました。

個々の記事への考え方を

切り抜き生かし進路を展望

らえさせました。

具体的に決まっていない生徒には、現実的なテーマや将来の自分に置き換えて考えられるテーマを設定して取り組みました。

小さなテーマのもと、各自小テーマを設定して記事を集めるところからスタートさせました。

まとめただけでなく、スクラップを終えた後に全体を通しての考え方や、これまでの考え方から変わった点を記述する活動も取り入れました。

学習を通して、新しい

こと

を受けている。

ブロック会議は昨年の青森市に続く開催で、柳谷直明・三笠小教頭、野上泰宏・西陵中教頭(帯広)、福澤秀・春光台中教頭(旭川)らアドバイザーと新聞協会、各地の推進協関係者を合わせ30人が出席した。

会議では、仙台市立松陵小の阿部謙教諭が「復興へ、NIEの役割」をテーマに発表。被災直後は震災関連記事を教材化する気はないなかつたが、子どもたちが作る「ファイト新聞」に背中を押されるように取り組み、「被災の困難を乗り越える人材育成も、NIE実践者の使命」と思い定めるに至った心情を語った。

道内からも「福島のこと(原発)をどう扱うか、悩ましい問題」「野上教頭」「年1回でいいから、学校全体でNIEを実践する機会を設けることが重要」「福澤教育」について紹介した。柳谷教頭は月1度、ボランティアで行う夜の「学習塾」について紹介した。東北の出席者からは、モデル校を指定した復興教育の試み(岩手)や、記者を招いた小学校の国語の授業例(山形)も報告された。

アドバイザー会議に先立ち、北海道と東北6県のNIE推進協事務局長会議も開かれ、事務局長を務める新聞各社の出席者からは実際に指定校の応募の少なさや、まだ低いNIE活動の認知度などについて課題や対策が報告された。

記事を読みながら北方領土問題を考える蘭越小の児童たち



わが国の領土である島々をロシア、中国、韓国などが自国の領土と主張して緊張が高まる中、北方領土問題で平和について考える授業が後志管内の蘭越小で行われた。ロシアが事実上の支配を強め、返還を求める日本と対立する難しい問題。児童は動きを伝える新聞を読み、自らの問題として解決策を考えた。

(大井一樹・北海道新聞NIE推進センター委員)

領土問題から「平和」学ぶ

蘭越小

授業は9月11日の4時間目、三和史朗教諭が6年生40人を行った。三和教諭は同小と留寿都小を回つて若手教諭を指導・助言する巡回指導教諭。

新学習指導要領では6年生の国語で「平和について考える」単元を学ぶ。アメリカが投下した原爆で多くの犠牲者が出て広島などの現実を知り、平和について考える計14時間の授業。信頼できる資料をもとに説得力ある意見をまとめて、適切なことばで主張

する能力を培う狙いだ。

同教諭はこれを北方領土問題に置き換えて取り組んだ。

担任教諭と相談し、夏

休みの最中に終戦記念日がはさまるよう指導計画を作つた。

北方領土は、旧満州に攻め込んだ旧ソ連軍が、日本の降伏直後に占領。島を追われた島民は故郷を捨て根

室などへ移住せざるを得なかつた。ロシアはその後も

自国領土との主張を変えず、同国首相らが島を視察。ブーチン大統領は領土

交渉はさらにその3分の1の時間しか行われず、中身

をつけさせた。

記者には「領土交渉視界開けず」という見出しで、

会談がわずか35分間、領土

交渉はさらにその3分の1の時間しか行われず、中身

をつけさせた。

記者には「領土交渉視界開けず」という見出しで、

会談がわずか35分間、領土交渉視界開けず」という見出しで、

会談がわずか35分間、領土

交渉はさらにその3分の1の時間しか行われず、中身

をつけさせた。

記者には「領土交渉視界開けず」という見出しで、

道内高校新聞

4

ナウ

の1頁を表情で切り取り、他の生徒にも発奮材料にしてもらおうという狙い。少しでも充実感のある高校時代を過ごしてもらいたいという熱い願いだ。

そうした気持ちは、局員に受け継がれる。取材現場では吉田渉編集長ら全員、競技を狙う位置、カメラ操作などを確認し合い会場に散る。吉田編集長は「大事なのは次の動作を先読みしながら撮ること。実践を積

むしかない」と語る。
一方の月刊版は、B4版
縦置きで月末に発行する。
昨年から今年にかけては東
日本大震災による原発問題
を追いかけてきた。
きっかけは2010年卒
の元局長の外崎彩乃さん
(20) の体験。進学先の、
いわき市にある「いわき明
星大」の学生としてサーク
ル活動中に被災した。
震災直後に連絡が途絶え
たが時間が経つてから無事

人を見て、被災地とは本当に違う世界だなと感じた」という。復興に力を貸せない無力さ、現地を見捨てるようになってしまったと思われないかという不安を感じたという。

しかし、これをきっかけに局員全員が原発の是非などを考えるようになった。深地層研究センターのある幌延町から通学している生徒もおり、現地を訪ねた特集やアンケートも行った。

取材した。

3階にある局室の壁には名寄高新聞という横書きの大好きな題字が貼つてある。コンクール入賞を伝える北海道新聞の記事コピーもあり、局員の奮起力を促す。顧問の滝沢英樹教諭は「新聞を近くホームページに掲載したい」と新たな発信の方法を探る。

吉田編集長は今後の課題として「新しいものに挑戦したい。全体におとな

お知らせ

編集後記

○…「実際に見学して新聞の大切さがわかりました。もし教師になれたら授業に新聞教育を役立てたい」。企業見学で北海道新聞を訪れる高校生が書いてきた記者体験への礼状にこんな一文を見つけると、うれしくなる。拙い当方の説明に込めたメッセージが伝わったのかな、という率直な喜び。

○…当ページの「高校新聞ナウ」の取材でも、社会で生きる自信を持ち始めた生徒たちの、やりがいを見つけた満足感、暗さばかりではない新聞の未来も感じじる。NIEへの重層的取り組みが果たす役割、必要性をあらためて思う

要性をめうつたので思う。
○…3年間、当機関紙を担当してきましたが、今回をもって交代いたします。これまでお読みいただいた皆さんに、心から感謝申し上げます。（大）



新聞局室で製作する新聞について話し合う部員たち

震災は自分の
ちにつながる
問題としてと
らえる力を与
えた。

外崎さんは
「名寄に戻る
途中、和やか
な表情でふだ
ん通り暮らす

が確認され名寄の実家に戻り、想像を絶する現地の様子を知人や後輩に話した。実際に経験した者でなければわからな
る機会を増やし、いろんな側面から考えてもらう意図だった」と明かす。このほか被災地でのボランティア活動の報告、稚内市の自然エネルギーの問題、さらには地元名寄市の、がれき受け入れ方針について局員5人で市役所に行つて忠告本喰。

メモ
1922年（大正11年）に旧制名寄中として開校。1950年7月16日に名高新聞として第1号を発行した。61年にいまの原型となる新聞局が誕生。任意と委員会制の2本建てで運営。動きのある写真で全道に知られ、記事は校内活動などを積極的に取り上げている。

▽発表者 稚内市立稚内
南小・本間康子教諭、同市
立稚内中・國廣尚人教諭、
稚内高・武藤禎弘教諭

同教諭は1996年に名寄新聞局の顧問就任と同時に写真速報の形態を取り入れた。季刊だった、それまでの発行を年50号に増やした。「生徒と一緒にカメラを担いで出かけ、表情を見とらえる撮り方を実際に見せて考えさせた」。生徒の頑張る姿、輝ける学校生活

速報版はB4版横置きで、写真が中心。高体連大会などに出席する選手を追つて、できるだけ大きく、1競技男女別に1号のペースで出している。センスの有無が歴然と出てしまう写真技術をどうするか。路線を敷いたのは、士別翔雲高新聞局で顧問を務める松本春樹教諭だ。

決定的瞬間や躍動感あふれる競技写真が「売り」の速報版と、校内の動きを追う月刊版。異なる2種類が補い合い、融合しているのが名寄高新聞だ。

原発特集で被災 名寄高新聞

(名寄)

原発というテーマが重なり合った。が、神藤綾巳局長は「敢えてそういう問題を取り上げた。この問題を取り上げ

識を紙面を通して少しでも高くできれば」と次の目標を挙げている。

お知らせ

稚内・宗谷で 11月セミナー

お知らせ